

## 与える愛、贈る喜び

(ヨハネ三・一六、マタイ二・九〜一一)

子どものころはもっぱら貰う側でしたが、大人になった今は贈ることが増えたものと言えば、そうクリスマス・プレゼントです。ショッピングモールに行き、相手のことをあれこれ考えて「これ」というものを選ぶのは大変です。第一悩んだ末に財布は軽くなるのですから割に合わないと言えなくもありません。でも家族や友人のことを思つてプレゼントを選ぶ時、そこには割に合わないことを超えた喜びを感じるのです。

先ほど読んだ聖書の箇所は先週上演したミュージカル、『いちばんはじめのクリスマス』にもあった東の博士たちがイエス様に贈り物をする場面です。この場面はまた多くのウェブサイトになどでクリスマス・プレゼントの起源だと紹介されています。しかしクリスマス・プレゼントの起源は人間の行為以上に、神様が私たちに贈り物をしてくれたという神様の働きにあります。今日はプレゼントを贈ることに ついて考えてみたいと思います。

## 一、神様からの私たちへのプレゼント

ヨハネ三・一六には「神は実にそのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」と書いてあります。神と云うのはこの天地万物を造られた神様であり、ひとり子とはイエス様、そして世と云うのはこの世に存在するもの全てです。当然私たち人間もそこに含まれています。ですから神様は世に居る私たちを愛し、その表れとしてたった一人、かけがえのない存在であるイエス様をこの地上に送つてくださったということになります。「沢山あるものうちの一つ」ではありません。スベアのない、唯一のもの、いや実の子を惜しまずに下さったのですから、そこには確かな愛があります。続いてそのあとの「それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」を見ると、神様がイエス様というプレゼントを私たちに下さったのには目的があるのが解ります。それは「滅びないで、永遠のいのちを持つ」ためです。神様は私たちが人生の道を踏み外し、滅びに落ちていくことをよしとはせず、私たちに救い、希望をもって生き、死の恐怖から解放されて生き抜き、天国にまで至れるように私たちにイエス様をプレゼントして下さったのです。

## 二、私たちから神様へのプレゼント

先週のミュージカルでも博士さんたちは星に導かれて講壇のところをぐるぐる回っていました。この博士たちの実際の旅は一〇〇〇キロを優に超えるものでした。ですから彼らはプレゼントを捧げる以前に、イエス様に会うための時間を捧げたと云えます。彼らはまた体力を捧げたともいえるでしょう。何しろ二〇〇〇年前のことです。自動車も鉄道も飛行機もありません。馬やラクダに乗ったとしてもそれは実に大変なこと。しかし彼らはイエス様に会いたい一心で長い旅をつづけたのです。そしてついに持ってきた宝箱を開ける時が来ました。そこに入っていたのはまばゆいばかりの黄金と高価で薫り高い香料、乳香（フランキンセンス）と没薬（ミルラ）でした。ちなみに没薬（ミルラ）は死体の防腐に用いられたことからイエス様の死を象徴しているという解釈もありますが恐らく博士たち自身はそんな意味を含めて贈り物をしたとは思えません。むしろ彼らはもつと単純に、イエス様のために自分たち出来る最高の贈り物を用意したと考えるほうがいいと思います。神様が下さったイエス様というプレゼントに感謝して彼らは心のこもったプレゼントをしたのです。その時彼らの心の中には不思議な喜びがあふれたのです。

\* \* \*

このように、クリスマス・プレゼントという概念は聖書に書かれている「いちばんはじめのクリスマス」の中にはつきりと見ることができません。神様は私たちのためにかけがえのないお方であるイエス様を贈り物にしてくださいました。またこのプレゼントを受け取る、つまりイエス様を信じるなら永遠のいのちが約束されます。他方でこの素晴らしい神様の愛に応えて多くの人がプレゼントを贈り合うのもまたクリスマスです。プレゼントが貰えるというのは嬉しいものですが、もしそれで留まっていたら喜びは深まりません。むしろイエス様がおっしゃった「受けるよりも与える方が幸いです」である（使徒二〇・三五）ということばにならつて、仲間、お世話になつている人、家族、更には困っている人々にプレゼントを贈るときに、みなさんの心には不思議な喜びが湧き上がってきます。与えるということは痛みを伴うことです。時間や労力、お金を使うのですから。でもその愛の行為によつてのみ、私たちの心は満たされます。あの日、東の博士たちが体験した真の喜びを皆さんも体験できます。愛を込めた贈り物によつて。メリークリスマス！

(ペテルキリスト教会牧師 大坂太郎)